

蜂須賀 靖人(愛知)

アイナホールディングス ㈱インテグロー

〒444-0873 岡崎市竜美台2-8-8 SGビル4F
TEL.0564-52-4717 FAX.0564-52-5570



革新的な製品の開拓と新しい施工方法の探求を。

㈱インテグローは、商社としてのモノの調達力と、職人を組織する安全協力会を中心とした施工力とを両輪として、タイル・住設機器を中心に様々な製品・工事を取り扱っていますが、弊社ならではのものを2つ紹介させていただきます。

1. 弊社では国内企業のみでなくイタリアを代表するキッチンブランド【Valcucine】が監修する日本限定のセカンドブランド【ValcucineJP】を取り扱っています。

【Valcucine】は人と自然との調和を図りながら独自の美意識を表現し、芸術性を備えた至高のキッチンを創造し続けるブランドです。

写真(下左)のキッチンは天板下部に水平ラインを描くステンレスを科学発色させたベルトラインが特徴であり、その存在が全体の印象を引き締めながら、キッチンそのものの芸術性を高めています。

2. 近年のデジタル印刷技術の進化により、タイルの意匠性が格段に上がっています。高

耐久などの機能面からサステナブル建材としてもタイルは見直されています。また意匠性のある超大判タイルも登場しています。

弊社では、【木造建築物の外壁に1m×3mの超大判タイル】を使用できる工法も承っております。

今後も革新的な製品の開拓、新しい施工方法の探求を続けてまいります。皆様の想像力のお役にたちたいと願っております。ぜひお声がけください。



50th
Anniversary

建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般
財団法人

愛知県建築住宅センター



CONTENTS

法人協定会通信 66

アイナボホールディングス(株)インテルグロー — 表紙裏
蜂須賀 靖人

地域会だより ————— 1

新年あいさつ 2024 ————— 2

大瀧 正也・澤村 喜久夫・石橋 剛・森 哲哉・内田 実成・森本 雅史

連載【隔月 全6回】建築とデジタル技術の承前啓後
第5回 - 承前啓後への試み(中編) - ————— 6
水谷 晃啓

特集: JIA建築家大会2023東海in常滑 / 大会報告特集

反省座談会 ————— 8

浅井 裕雄・西村 和哉・黒野 有一郎・柳澤 力・川本 直義・恒川 和久

大会に参加して ————— 12

松山 将勝・伊良波 朝義・出口基樹・寺田 智之

新年広告 ————— 14

保存情報 第264回

登録有形文化財:旧伊東合資会社主屋・新座敷・本土蔵 15

原 眞佐実

編集後記 ————— 15

石田 博英・江川 静男

JIA建築家大会2023東海in常滑 大会を終えて — 16

小田 義彦

大会写真集 ————— 17

地域会だより 今後の予定

■ JIA東海支部

・1/19 第7回支部役員会

■ JIA静岡地域会

・1/11 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)

■ JIA愛知地域会

・1/12、19 名古屋市立大学「建築家の仕事」

・1/26 第8回役員会

・1/26 賛助会企業PR会

・1/26 新年会

■ JIA岐阜地域会

・1/16 第9回役員会 18:30~20:30

■ JIA三重地域会

・1/27 JIA三重 建築文化講演会2024 講師 長坂 常「半建築」

会場:アスト津アストホール

※1月27日14時開演に変更となりました

表紙 常滑の景色……⑩「若手陶芸家」



大澤哲哉 陶芸家

ヤスリをつかった技法で古道具のようなヤレた器をつくる。

大好きな作家のひとりで、時間とともに劣化したがる建築によく似合う。

現在、野外クラフト展示イベントの「トコクラ」を主催している。陶芸の先輩から引き

継いだのだ。また、彼の師は先人があるから今があると言っていて、社会と陶芸家の

立ち位置を語ってくれている。建築家も若手に伝えることが沢山あると常滑で思う。



浅井裕雄 (JIA愛知)

裕建築計画

◆新年のご挨拶

皆様、新年あけましておめでとうございます。

日頃よりJIA東海支部の活動にご協力いただきありがとうございます。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

●世界的に猛威を振ったコロナ禍も一定の収束を見せており、日常はコロナ前に戻ったかのように思えますが、はたしてそうでしょうか?WEBによるツールの普及により、会議へのハードルが下がっており、「これを便利だと考える人」、「やはり顔を突き合わせて話すべきと考える人」の2極化が進んだように思います。どちらが良いのか判断できませんが、いずれにせよ選択肢が増えたと前向きに考えるようにしています。

●JIAでは佐藤会長就任より1年以上が過ぎ、「頼りになる建築家、頼りになるJIA」のサトウ・イズムが浸透し始めたと感じています。本部では「頼りになる建築家」の認知度を一般社会に訴えかけるため、HPの改良とSNSによるPR広報を進めています。支部においてもマスコミ、SNSを利用したPRが必要だと思っており、東海支部には歴史あるすばらしい企画がたくさんありますので、それをどんどん発信して参りましょう。

●もう一つのテーマ「頼りになるJIA」に関しましても、社会的に魅力的なJIAの実現を目指し、「建築家資格制度」について1年以上前より本部理事懇談会が開催され、再構築と理解を得るために日々行動をしています。今後、シンポジウム等、さらなる意見交換会が開催され、より良い方向に進んでいくのではと期待しています。

私個人としましては、この資格制度自体のたてつけについて、やはり、メンバーシップとしてのJIA会員であることが1階であり、その2階にライセンスとしての登録建築家があるように思います。1階があってこそ2階があるのは当然だと思います。また、UIAアコード、專業性、利益相反、公益保護、寄与、CPDといったワードが1階にあるのか、2階にあるのか、細部を検討していく事がわかりやすい様に思います。今後、引続き話し合いが持たれると思いますが、それに酔う事なく結論を出すべく先に進めたいと思います。やはり、会員数、登録建築家数の減少が根本にあるのだと思います。会員数増強に付きましても皆様のご協力をお願い致します。新年から少し重い話になりましたが大切な話ですね。

●さて、昨年は「JIA建築家大会2023東海in常滑」の開催、皆様本当にお疲れ様でした。そして本当にありがとうございました。小田大会委員長、浅井大会実行委員長をはじめ各セク

ションの担当の皆様の身を削る思いに、心より感謝申し上げます。また、本大会開催にあたり、法人協力会の皆様、会員・個人の皆様にご協賛を頂きましたこと、誌面をお借りして厚くお礼申し上げます。

「環る」(めぐる・まわる・かえる・よみがえる)のテーマのもと、大会ウイーク、メインシンポジウム、その他多くのイベントについてのテーマに沿った形での企画運営、本当に見事でした。ウェルカムパーティー、街歩き等降雨により残念な場面もありましたが、山車の曳き回し、木遣り等参加者の心を打つ内容で、雨と共に記憶に残るものとなりました。また、レセプションパーティーでの日本福祉大学附属高校和太鼓部「楽鼓」による和太鼓演奏は大変素晴らしいものでした。

東海支部では、常に外側から「どの様に見えるのか」「不便なことはないか」「参加者が満足しているか」を考え、ホスピタリティあふれる対応が出来たと思っております。しばらく残務が残りますが、次回九州大会に引継ぎが出来ます様、宜しくお願い致します。

●次に支部事業についてですが、「東海卒業設計コンクール」「東海住宅建築賞」「東海支部設計競技」「雑誌ARCHITECT発行」各地域会事業等が実施される予定です。「西尾市生涯学習センター設計者選定」につきましても、受賞者が決定し、今後、市民ワークショップ等JIAの支援業務が継続されます。さらに昨年は東海支部が主幹を務めます本部事業「ゴールデンキューブ賞」において4チームが選出され、その後の「UIAゴールデンキューブ賞」において最優秀賞と特別賞を受賞するという特別な大会となりました。

●本年は支部長改選の年であり、私の任期も終盤を迎えますが、相変わらずフットワークの良さと人肌感を大切にしながら支部内を駆け巡りたいと思います。

皆様のご協力を宜しくお願い致します。



JIA東海支部支部長
大瀧 正也

新年あいさつ

◆資格制度のこれから

あけましておめでとうございます。
本年もどうぞよろしくお願いたします。

■若水迎え

お正月は各地に年神様をお迎えする伝統的な行事や風習があり、暮らしの中で最も重要な年中行事です。私が中学校卒業まで過ごした美濃の実家では「若水迎え」があります。若水は元日の朝早く初めて汲む水のこと、神様にお供えし、この水で拵えた雑煮をいただくことで一年の邪気を払うと教わってきました。早朝まだ暗いうちに父が松明を点け、水道の蛇口からやかに水を汲みます。祖父の時代は井戸から汲み上げていましたが、今はその井戸からポンプで汲み上げています。かつて美濃和紙を漉いていた実家の「川屋」には水神様の石碑があり、正月には鏡餅をお供えします。この川屋では紙の原料を浸すことに始まり、漉き舟に水を張ることも、すべてここから汲む水がなければ成り立ちません。そのため生活だけでなく、生業に欠かせない水を大切にしていました。一年の邪気を払うと同時に井戸水が枯れないよう、一年間紙を漉くことができるよう願ったものです。

現在、実家は公共水道を引いていますが井戸も利用しています。その井戸水が枯れる期間が長くなってきました。雨が降ると翌日には水位が上がり、その後降雨がなければ短期間でまた水位が下がります。以前は大雨が降った後、3～4日後に水位が上がり、冬期を除けば年間を通して枯れることはまずありませんでした。周辺のスギやヒノキが伐採され太陽光発電のパネルに置き換わりつつあります。このため大雨が降れば短時間に川の水は濁るようになり、道路端の湧き水も翌日にはあふれ出します。子どものころには見なかった光景です。

地球温暖化が深刻な問題として指摘されて久しく、近頃では従来あまりとれなかつた魚が大漁になるなど、海の異変がメディアに取り上げられています。生まれ育った美濃も例外ではなく、過疎化による地域の荒廃と環境変化を目の当たりにするとき、我々が携わっている建築分野においても脱炭素化に向けた取り組みを推進することが重要であると感じます。建築設計にかかわる者として、省エネルギー対策をはじめ、エンボデイド・カーボン対策、既存ストック活用などの推進を強く意識するようになりました。

■建築家資格制度

JIAの活動において、昨年からは本部理事を務めております。

佐藤尚巳会長の提唱される“頼りになる建築家、頼りになるJIA”を目指して活動を行っていきたいと思います。

その一つとして設計者資格制度の改革が挙げられます。東海支部でも昨年度の会員集会において、資格制度の経緯を学び、その課題を整理し議論してきました。昨年のJIA建築家大会ウィークにおいても「資格制度のこれから」と題して意見交換が行われました。主に、①新資格制度=国内統一基準のオープンな国家資格、②JIA正会員=「建築家」の2本の柱で議論が進められました。

2003年度にスタートした建築家資格制度は、UIAアコードを満たす登録建築家の認定・登録制度です。その後は制度も推進されましたが、数年前からは会員数、登録建築家数も減少しています。加えて会員規程に定められた正会員全員が登録建築家になることは実現されておらず、社会的な認知も極めて低いのが現状です。また段階を経て最終的には建築家資格を国家資格にすることを目指して建築士会連合会と共に進めてきましたが、その実現には至っておりません。

この閉塞感を打開する案が、理事懇談会で示された先述の新資格制度への移行かと思えます。私もJIA正会員=登録建築家が進むべき道と考えます。改めてJIA建築家憲章をはじめ倫理規定などを読み返してみると、社会公共、依頼者、利用者などに対して建築家としての役割と責任の重さを認識させられます。先人が築きあげてこられたJIAの理念を受け継ぎ、建築家の職能を広く世間に知ってもらうことが重要です。

昨年、東海支部が支援する形で「西尾市生涯学習センター(仮称)コンペ」が行われました。このコンペでは公共建築の設計実績がなくてもJIA登録建築家や建築士会連合会の統括設計専攻建築士であれば参加資格として認められました。これにより登録建築家の資格で応募された方が13名あり、資格制度の認知度を高めるきっかけとなりました。

登録建築家制度の啓発も含め、職能団体として社会から信頼が得られるよう努力を重ね、建築家として誇りをもって活動していきたいものです。



JIA本部理事
澤村喜久夫

JIA2024 新年あいさつ

定番の事業を充実させて静岡地域会を活性化したい

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

地域会長任期の2年目が終わろうとしており、来年度の新体制についても役員会の議題に上る頃でもあります。昨年1年間のJIA静岡の活動を振り返るとともに、今年の抱負について述べたいと思います。

まず、去年は実に5年ぶりに建築ウォッチングを開催することができました。地域会長になって1年目の活動では、まだまだコロナの流行等も残っており、なかなか元通りの活動とまではいきませんでした。2年目によく元に戻ってきたという感じです。ハケ岳方面の日帰りバスツアーでしたが、会員以外の参加が半数近くあり、全体としても募集人員を上回る申し込みとなるなど手ごたえのある事業が開催できました。魅力的な事業を行うことで、会員外からの参加も

増え、JIA静岡の活動を知ってもらうとともに、会員拡大の機会にもつなげられるようにしていきたいと思います。

もう一つの継続事業であるJIA塾については、昨年1回、年明けにもう1回、計2回開催できそうです。こちらも、法人協会の皆様に講師役を引き受けていただくなど、新しい知識に触れるだけではなく、法人協会員の皆様との交流の機会にもなりつつあり、今後も続けていきたいと思っています。

来年度の新体制についての検討も進めております。同じ顔ぶれの役員が継続するのではなく、運営体制の新陳代謝が少しでも進むようにしたいと考えております。最近では役員が顔ぶれが固定気味で、人数的にも定員割れ状態でしたが、それも元通りの人数にしていきたいと考えております。これまで、役員をやったことがない人も気軽に

参加できるような体制づくりを進めていきたいと思っています。

この原稿を書いているのは締切りも過ぎた師走の上旬です。昨日、静岡地域会の忘年会があったのですが、参加者もコロナ前の人数に近づいて、かなり賑やかに開催することができました。小さなことの積み重ねではありますが、建築ウォッチング、JIA塾といった定番の事業をさらに充実させて、ますます静岡地域会の活動を活発なものにしていきたいと思っています。



JIA静岡地域会長
石橋 剛



先を見据えて未来に責任ある活動を

新年あけましておめでとうございます。日頃より会の活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

昨年の11月9日-11日「建築家大会2023 東海in常滑」が行われました。地元開催となり、大変ではありましたが、賛助会様、会員の皆様のお力添えにより、実り多い大会となりましたことを心より感謝申し上げます。大会で行われた多くのシンポジウムは、コンペ、資格制度、まちづくり、保存再生、若手建築家、子どもの建築教育、災害対策など、日常の課題の延長にあり、議論を深め、多くの会員と共有することができました。日頃の活動の大切さを改めて感じるようになりました。

就任にあたり、①地域に根差した公益活動 ②地域会のアップデート ③未来に

責任ある活動の3つを掲げて参りました。

①としては、「お店をつくらう!〜小さなまちづくりプロジェクト〜」建築ワークショップ@豊橋、猪高小学校での建築教室、「建築家+」の発行、名古屋市立大学での出前授業「建築家の仕事」、一般市民に向けた建築相談など、大会準備の最中でも継続できたことに感謝しています。②は、オンラインによる会の運営も定着し対面活動との使い分けも進んでいます。今後は、HPのリニューアル、委員会構成や財政についての検討が必要です。③は、コンペなどの行政サポート、建築家資格制度、「天使の森プロジェクト」への参加、SDGs、若手育成についての取組みがあります。どの課題も一朝一夕にはいきません。コロナ禍で手にした本※に「マシュマロとどんぐり」の話がありました。マシュマロとどんぐりが目の

前にあったら、どちらを選ぶ?ということ。マシュマロはすぐに食べられ美味しい→短期の利益や成果を優先する現代人の脳。どんぐりは育つのに時間がかかるが、大きく成長し恵みをもたらす→長期視点に立ち未来を思い描く脳ということ。どんぐり脳を増幅させ、粘り強い活動の継続が大切だと感じています。皆さまの積極的な参加をお待ちしています。

※「グッド・アンセスター」
ローマン・クルツナリック著 松本紹圭訳



JIA愛知地域会長
森 哲哉

JIAが会員皆様の楽しめる場になるように

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いたします。2023年度の岐阜地域会の事業も2つが終了し、残り2月と3月の2つの事業があります。総会時に会員の皆様にお話しさせて頂きました残り事業に全力で取り組んでいきたいと思ひます。

昨年は、地域会の事業だけでなく、多くの学びの場をたくさん経験させて頂いた年でした。常滑大会が盛大に行われ、エクスカッションの計画と実施を経験させて頂きました。大会キーワードである「環る」を基に、役員会でも皆で意見交換し、良い提案ができ、参加者の方々にも喜んで頂きました。

今年度は、4つの事業がありそれぞれに担当委員長と副委員長の方々に事業を担当して頂いています。9月に行った講演会

は、昨年入会して頂いた北村さんが委員長として事業を担当して頂きました。12月のぎふ20×20コミュニケーションは長田さんに、2月の建物見学会は今年度正会員になった山田尚紀さん、3月の研修旅行は長尾さんに担当して頂きます。それぞれの事業を皆でバックアップし成功につながるように、地域会として頑張っていきたいと思ひます。引き続き、JIAの事業を通して会員皆様全員が充実し楽しんだ一年になるように努めていきたいと思ひます。

昨年会長になり、基本方針として会員拡大と会員力向上を掲げ、事業に取り組んでまいりました。会員拡大としては、一昨年・昨年と岐阜地域会に新しいメンバーが入会して頂きました。さらに会員拡大に力を入れ、共に活動できる仲間を増やしたいと思ひます。そして会員の皆様には、一人

一人にJIA活動が楽しめる場になるように、努めてまいります。合わせて東海支部の事業内容や理事会の内容の落とし込みを行い情報共有し、支部活動の理解も増えるよう、役員会を運営したいと思ひます。

本年もどうぞよろしくお願いたします。



JIA岐阜地域会長
内田 実成

「建築のはなし」は出来ましたか

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願申し上げます。

今年度のこれまでの三重地域会の活動をご報告いたします。

●4/2総会記念講演会：笠原一人先生（建築史家・京都工芸繊維大学助教）をお招きし「村野藤吾の建築-志摩観光ホテルを中心に-」をお話していただきました。初めて知る内容も多く、村野藤吾・三重の建築について語る機会となりました。地域会の総会記念講演会ででありながら他の地域会・一般の方のZOOMでの参加が多く、計70名以上の参加となったことは今後の活動に可能性を感じました。

●7/8建築ウォッチング：久しぶりにバス移動での「水都大阪の歴史と今をめぐる旅-中之島周辺散策-」を開催しました。太陽の塔、水上バスから見る水都大阪の風景が印象的で会員同士で議論しながら見

学する機会となりました。

●会員研修会（3回開催）：8/5「企業・現場から今を学ぶ ～法人協力会との意見交換会～」は、法人協力会主催のボーリング大会も開催され交流が深まりました。10/6「三重建築散歩出版へのみちのり」講師：萩原義雄氏は、今後の出版の可能性について議論しました。12/8「再生活用を法規で支える」講師：建築再構企画代表：佐久間悠氏は、テクニカルな部分での再生について学ぶ場となりました。

●教育支援活動：10/11・11/8三重短大1年生出前授業。12/9三重建築学生合同課題発表会2023は、三谷裕樹（ナノメートルアーキテクチャー）さんをゲストに迎えを開催。今年で3回目となりました。学生同士の交流も活発で「建築のはなし」がはずむ学生・会員たちの様子がみられました。

●例会時の話題提供：会報誌「JIA MAG-

AZINE」から気になった一言をお伝えすることにしました。昨年同様報告事項が多い中、少しでも建築の議論のきっかけになればという試みです。

昨年の新年のあいさつで「建築のはなしをする場をつくっていききたい」と書かせていただきました。いかがだったでしょうか？残り任期も4か月程となりました。これまでの皆様のご協力に感謝いたしますと共に、残りの期間もよろしくお願申し上げます。



JIA三重地域会長
森本 雅史

承前啓後への試み(中編)

□対話的な手法の展開

前回(第4回)の連載において、コンピュータと対話しながら都市デザインスタディを行う手法として、対話型都市設計支援ツールを紹介した。そこでは、コンピュータ・シミュレーションとデザイン入力をシームレスに接続することでコンピュータとの対話性を獲得し、設計者の一挙手一投足に対するシミュレート結果が即時的に図式としてフィールドバックされる利点について述べた。そのうえで、デザイナーの空間に関する思考力を拡張する図式の一つとされるノーテーションとの関係から、コンピュータとの対話経験が都市空間を思考するための媒体となり、空間的な創造力を喚起する働きがあることを示した。加えて、この試みが丹下健三研究室のコンピュータを用いた被眺望範囲図の生成プロセスを意識したものであり、デジタル技術応用の承前啓後としてシミュレーションとデザインの連動、フィードバック回路の構築を行った点が重要であると述べた。

今回は、前回でデジタル技術応用の承前啓後において重要な点として強調したシミュレーションとデザインの連動、フィードバック回路の構築をより敷衍させた試みについて紹介していきたい。

□デジタル技術を援用した形態探索

今日のコンピュータを用いたフォームファインディングの有効な手法を生み出した「構造形態解析」という言葉は、我が国では1990年代初頭から使われ始めたとされる。「構造形態解析」という言葉を最初に使った半谷裕彦は、この造語の意味を構造物の「形(かたち)」と構造物内部に生じる応力や歪みの「態(ありさま)」

の相互関係を力学的な方法により解析する概念である述べ、それまでの「構造解析」との違いを説明した。この構造形態解析よりも、より設計に近い概念、所与の力学的な構造性能を具現する構造形態を求めるものとして「構造形態創生」というデジタル技術を応用した手法が用いられるようになった。

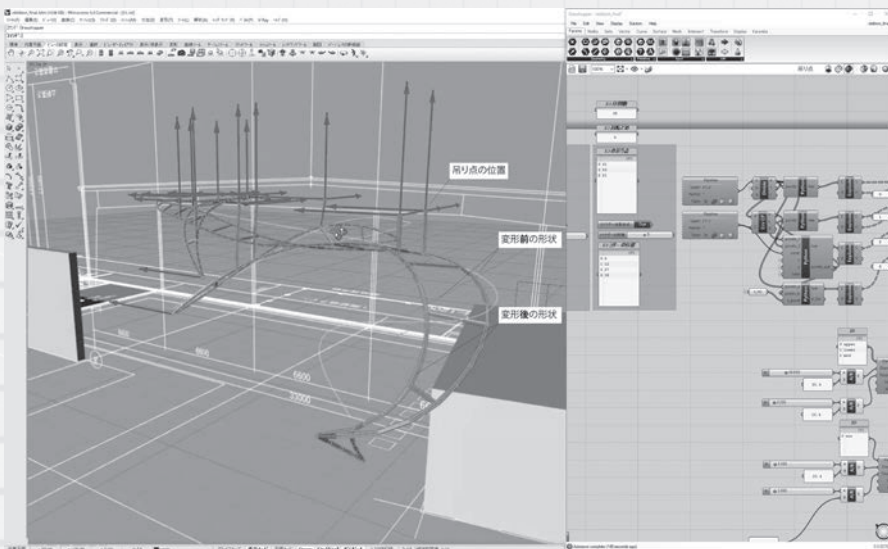
アントニ・ガウディの三次元逆さ吊り模型実験などに代表される構造形態の創造的な発見手法に、これまで単に計算の道具であったコンピュータを導入した点、特に最適形状をコンピュータ・グラフィックスによって図式化し、把握可能にした点が「構造形態創生」の革新的な部分であった。当初の単に数値のみが構造計算結果として出力される場合とは異なり、最適形状がコンピュータ・グラフィックスによって図式化されることで視覚的に把握できるようになり、頭ではなく感覚、身体的に捉えることが可能になる。この連載で度々触れているC.アレグザンダーらの高速道路のスタディと、それを日本に最初に紹介した磯崎新が佐々木睦朗とともに行った「フラックス・ストラク

チャー」と名付けられた構造形態創生手法が、デザイン対象を「身体的に捉える」という点で通底していることは、おそらく偶然ではない。

□対話的に行う構造形態創生の試み

今回紹介する対話型構造形態創生は、前回既に紹介したRhinoceors, Grasshopperに加えてKarambaという構造計算プログラムを用いて行った。KarambaはC.Preisingerと Bollinger-Grohmann-Schneider ZT GmbHが協力して開発した構造計算ソフトでGrasshopperのパラメトリック環境に組み込むことができる。Karambaは計画初期段階における構造解析ツールとして十分な条件を満たしていると考えられ、このシステムを用いることで非専門家であってもパラメータ化されたジオメトリモデルと有限要素計算および最適化アルゴリズムを容易な手続きで結合でき正確な構造計算と分析が行えるとされる。

建築家の日笠直彦さんと横浜トリエンナーレで取り組んだ事例では、スチール製単管パイプを室内の天井から吊りした



(図1) Rhinoceors, Grasshopper, Karambaによってシミュレートされるモデル



(図2) 支持点のみで吊られた状態の単管パイプの形状

際に生じる変位量の計算、初期形態から変形した形状の視覚化にKarambaを用いている。吊られる前の初期形態の生成はRhincerosのスプラインを用いた。そのパラメトリック化にはGrasshopperを用いており、複雑に三次元化された形態の生成とその制御、変位量と応力分布の把握がコンピュータ・グラフィックスによる視覚化を通して支援される。スプラインによって入力される初期形態に対し、図1にピンク色で示される変形後の形態が即時的に視覚化され、連続的にシミュレートされた変位と応力分布を常に確認することができる。そのため、ピンク色で示されるシミュレート結果を観察しながら、同じく図1に水色およびオレンジ色で示される初期形態をコントロールしながら、意図する最終形態となる単管パイプの初期形状の設計を行うことができる。

具体的な形態スタディ手順は、①スプラインのコントロールポイント座標位置の

操作を通したジオメトリモデルの修正(Rhincerosでの操作)、②単管パイプが天井から吊られる際の支持位置をスプラインの分割点から選択(Grasshopperでの操作)するという二つの操作が、シームレスな手続きによって複数回繰り返えられる。

初期形状として入力されたスプラインから、解析に用いられるジオメトリモデルへ自動変換が行われ、変形後の形態をシミュレートするための計算処理が自動的に実行されるため、このシステムを援用する際に形態デザイン以外のことを気にする必要はない。それ故に、ピンク色で表示される形態の変化や振る舞いを観察しながら①、②の手順を繰り返し、粘土細工のような要領で得たい形態の探索に没頭することができる。このツールを援用することで、二つの簡単な操作の組み合わせから無数の形態パターン、初期形状の検討が可能となった。

□ デジタル技術応用の承前啓後から得たもの

3次元的に変形した単管パイプが空中に吊られた際の変形を扱うモデルは、図1で示されるように単純梁のように一方向への変形ではなく多方向へ複雑に変形するモデルである。この身体感覚では把握できない挙動は、コンピュータ処理を通して視覚化することなしに形態の操作、デザイン対象として扱いきれない。仮に単管加工に長け、構造的な物性を経験的に知り尽くした熟練工が、その振る舞いを身体感覚として捉えることが出来たとしても、普通的设计者においてはもっと単純なモデルであっても至難の業であろう。それまで単管パイプによるオブジェのデザイン、加工を行ったことがない筆者らでも、対話型構造解析プログラムを援用して図1に示す方法で設計したことで、図2に示すように変形後の形状までを自らの設計対象として扱うことができた。デジタル技術を応用することで、その構造的な特性を身体的に理解することができ、通常であれば設計できない対象を扱うことが出来たように、デジタル技術応用は設計の領域を拡張させることができる。意匠と構造の双方のデザインを並列的に扱うことで、これまでにはない設計プロセスを獲得すると同時に、形態スタディを通して構造原理を感覚的に理解するツールの開発が行える。

前回同様に、丹下研がアーバン・デザインの専用言語である「URTRAN」の開発においてなしえなかったシミュレーションとデザインの連動、フィードバック回路の構築を行うことが、今回紹介した承前啓後においても重要な点であった。

水谷 晃啓 MIZUTANI Akihiro

建築家。M2A主宰。豊橋技術科学大学 准教授。博士(工学)。1983年生まれ。2013年芝浦工業大学大学院博士(後期)課程修了。2009年隈研吾建築都市設計事務所。2010~14年SAITO ASSOCIATES。2013年芝浦工業大学博士研究員。2014年~豊橋技術科学大学、東京電機大学、芝浦工業大学非常勤講師。

豊橋技術科学大学大学院 准教授
M2A主宰
博士(工学)・一級建築士

水谷 晃啓



JIA建築家大会2023東海in常滑 反省座談会

2023年11月16日 / JIA東海支部 事務局 (リモート併用)

参加者: 浅井 裕雄・西村 和哉・黒野 有一郎・柳澤 力・川本 直義 (順不動)・恒川 和久 (進行)

恒川:今日は大会実行委員会でコアとして頑張った方々にお集まり頂きました。まず、終わったばかりのこの大会がどういうものだったのか、印象に残ったことについて話を伺います。

浅井:とにかく皆さんご苦勞様でした。まず、大会自体を「小さくて大きな大会」というテーマで動いたつもりですけども、うまくいかなかったというのが正直なところ。ただ、終わってみると、来てくれた方々が喜んでくれたのも実感で、会う人会う人、非常に心に残る大会だって言うてくれたことにほっとしています。

常滑を会場にできたことは特によかったです。常滑の人たちも振り向いてくれたし、特にウェルカムパーティに山車が出てくれたことで、地域とJIAが一体化できたのは非常によかったなと思っています。

1か月前から始まるオンラインの大会ウィークでたくさんのイベントをやって、替わりに本大会を小さくしようする試みはうまくいかなかったけれども、コンテンツが増えて反響が大きかったことはよかった。初日の「風土をデザインする」という企画から平均的に150名を超える参加者がおり、大会ウィークが定着する兆しはできた気がします。

ただ、その分、本大会を小さくできなかったところが反省点です。僕らが予測できてなかった、本部からの仕事も多かった。式典もそんなに頑張る必要があるのかと思ってはいたけれども、やらざるを得なかった。それがタスクだと最初から言われていれば納得したけれど、支部ではコントロールできないことがたくさんあったというのが実感ですね。

お金集めに関しては、水野さんが頑張ってくれて目標に到達できたけど、振り返ってみると

2500万円も使う大会をこれからも毎年やっていくのかという疑問は残ります。レセプションに12,000円払って、どれだけ若手が参加できるのかと思います。いまの形を否定するわけではないけれども、次の大会にメッセージを残すなら、もう少し身軽にやれたらいいなと思います。ただ、今日も常滑市の山田副市長からメールを頂きましたが、やっぱり全般通して皆さんの印象に強く残って良い評価を頂いたということは、大成功だったと言っていいと思います。

西村:本大会会場設営と大会ウィークを担当させてもらいました。驚いたのは大会ウィーク。週に2つぐらいで1ヶ月間というイメージだったんですが、思いの外、企画希望者が多くて、結局、毎週ほぼ毎日のように企画が入りました。僕らが各企画にきちっと参加し、把握して当日を迎えるというのが理想のイメージでしたが、参加する余裕がない状態でした。次の大会の参考にすると、2ヶ月とか半年ぐらいの期間を設けて、大会イヤーというぐらいの余裕を持つてはどうかと思います。

本大会も含めて参加者の満足度はすごく高かったと思います。本大会はできるだけ多くの企画に参加できるようタイムテーブルを組みました。ただ、こちらが終わったら次の会場みたいに移動も大変で、詰め込みすぎで、当初、イメージしていたような、ゆったり街歩きをしながら考えてもらうということにはならなかったと思います。

「小さくて大きな大会」とは違ってしまったという意見もありましたが、参加者からは「小さくて」を、常滑という「小さな街で」と捉えて、そこから「大きな実りのあることを考える機会」になった「大きな大会」という意味で捉え、大成功でしたね、というような意見も頂いていますし、成功だっ

たと思います。

常滑の街中の会場使用も初めての試みでしたが、何もない会場を使えるようにするというのは大変でした。旧青木製陶所では会場を明るくきれいにしようという考えもありましたが、ありのままを見せることによって、建築家の感性を刺激するのではないか、考える場としてはいい会場になったのではないかと思います。

国際委員会からは「過去最高のIPF会議だった」と褒めていただき、特に山車曳きでの、建築家と街の人が一緒になって参加しているという風景を、IPFの海外の方が絶賛していた。また2日目のIPF会議も旧丸利陶管で開催でき、最後は柳澤さんのエクスカージョンのアテンドも良く、何も不自由がなかったという感想を頂いております。

全体的に見れば、やってよかったというのが実感ですが、やはり人もスケジュールもゆとりが欲しいと感じます。

黒野:常滑については、当初からここでやれば面白いことになるなという予感がありました。僕の担当は大会のデザインに関することでしたが、当初の読みよりずっと行う範囲が広くて、結果的にはデザイナーの谷野さんが頑張ってくれたおかげで上手くいったかなと思いますし、彼を紹介したことで僕の仕事のほとんどは終えられたと思います。彼が乗りながら仕事していくにはどうしたらいいか、手ぬぐいとか旗も彼がいくつか案を出してきたものを僕なりにディレクションはしました。アイテムについては、お互い持ち寄ったものがわりと良かったと思うし、キーカラーとなった紫色を最初に提示して受け入れてもらったのは良かったなと思います。

予想外だったのは、JIAマガジンなどの広報の



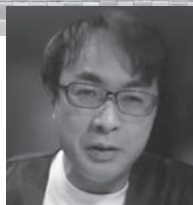
JIAと、奥条の山車と地域の方々@INAXライブミュージアム



これからの建築家としてのあり方を考える@旧丸利陶管



浅井 裕雄



西村 和哉



黒野 有一郎



柳澤 力

作業が読めてなくて、事前に決めないと情報が出せないことがたくさんあったことですね。結果的にそれがリーフレットに繋がっていくんだけど、情報の決定がスムーズにいかなかったりと、予想外に仕事量が増えました。あとホームページ。ちょっと直してみたいなオーダーが何度も来るんだけど、1ページ毎につくり直すので、作業量としては膨大だったと思う。逆に仕事量をかけた分だけ、ホームページは非常に充実したと思います。もっとディレクションをきちんとして、やらないこととかできないことをはっきりさせないといけなかった。ただ、全貌が徐々に明らかになるので、上手くできなかったのは仕方ないと思います。でも、ビジュアルは、ひとつひとつにエクスクーズがついていて「何で紫？」って問われたら、ちゃんと答えられるというのは良かったと思います。

途中から事業委員会の我々の担当になったエクスカーションについては、大変申し訳なかったと思います。ただエクスカーションは、もっとライトなメニューをそろえるべきだったと思うし、旅行代理店にあそこまで負荷を負わせなくても良かったと思います。観光バスですべて連れて行くのではなく、例えば「何時から何時まで〇〇会場空いてますから、ご自由に来てください」というようなやり方でもよかったような気がします。青森や沖縄のような足がない地域ならわかるけど、愛知はしっかりしてるので、個人個人で行ってもらっても良かったと思います。ただ成立したツアーに関してはどれも好評でした。

恒川: マガジンとアーキテクトの担当としては、谷野さんに甘えているいろいろやってもらい申し訳なかったと思っています。ただ、事前に出す広報のための中身が決まらなくて、なかなか情報が出てこなかったのは実際悩ましかったです。

柳澤: パーティ担当としての反省点は食事につきまします。多くの人から「大会良かったけど食事だけは…」みたいな感想がついてきちゃう。これはもう大反省点ですが、ただ、フードロスをなくすためにどうしたらいいか、あるいは、コロナ対策でケータリング屋さんが考えているところもあって、詰めきれなかったことが反省です。それと初日は、予想以上に人が多かった。街の若者や子供が参加してるのは衝撃だったみたいな嬉しい感想も頂いているので、その辺をトータルでマネジメントできればよかったというのも反省です。

とにかく一番良かったのは事故がなかったとい

うことで、初日の雨はともかく、最初から最後まで特に大きな事故やトラブルがなかったのは何よりでした。コロナとかインフルによるクラスター発生も心配したけどなくて良かったです。

僕も今まで関心がなかったのが、大会式典とか鏡割りとかいわゆる偉い方たちへの対応で、名誉会員とか、フェロー会員とか、本部の来賓とかいろいろな方たちがいらっしやるけれど、その辺の仕組みがあまり分かってなくて大変でした。こうした形式とか、最初から分かっていたら、改造したり簡略化したりできたなと思いますが、分かった頃にはもうやるしかないという感じになってたというのが正直なところです。JIAも少子高齢化が進むなか、少ないマンパワーで、これだけのことをやらないといけないくかと思えます。そんな中で、シンポジウムでは若手建築家にスポットを当てたり、地域の高校生や若者に演じてもらったり、パーティーで子供含めて街の人に来てもらって、建築家を若者にアピールする、あるいは、若者に光を当てるプログラムを組めたのはいいところだったと思います。

パーティーで言うと、会場やケータリング等のブローの業者さんから、面白いやりがいのあるパーティだったと言って頂いていて、あまり形式化し過ぎてない部分もあったのが良かったかなと思います。地方の方からの感想として、小さくて人口も減少してるような県や市・町でもこういう盛り上げ方があるのかと、常滑にスポットをあてて、市民も参画して、街のパワーを見せてもらったことに対して褒めて頂いた。

実は、最初に常滑の副市長にあいさつに行ったときは、パーティーや宿泊は名古屋でと考えていたのですが、副市長から常滑ですみますから全部組んでください、と言われて、常滑の中で完結させようっていう流れができました。副市長が応援してくれて、実行委員会の一員くらいの協力を頂いて、建築家だけでなく地元の人と合体した大会にできたのがとても良かったと思います。

次の人たちに向けてのメッセージとしては、建築家だけがやる大会でなく、地元を巻き込んでやると面白いくことですね。あと、これだけ少数の実行委員でこれだけのことができたというのは自慢できることですね。ただし、その少数がみんな大変でした。浅井さんが九州大会に向けて「なんでも協力するよ」と言っていたのは大事で、今回も沖縄の人に時々助言に来てもらえれば良かったと思うし、地方同士で応援し合えば無駄が少ないと言うのが助言です。

浅井: 我々まさからやったイメージがありますよね。申し送りがあれば想定できたことで、最初はそれを全部はねのけちゃおうって気持ちだったけど、後から後から出てきてまかり通らなかったことで、大きな大会になっちゃった。やらなきゃいけないなら申し送りがあってしかるべきで、これを本部がやらないなら東海から始めてシステム化して、九州に渡してあげようという気持ちはありますね。みなさんが言う通り、東海大会は我々のオーバーワークで出来上がった大会ですよ。それで、次の九州の人たちには知らせてあげたかったからslackに入ってもらいました。情報整理して渡してあげれば、うまくやれると思います。

あと、こういう大きなイベントをすると、自分たちの支部の弱いところがよく分かる。やっぱり人が育ってないというのが実感で、僕が2015年の支部大会の実行委員長をやった時とほぼメンバーが一緒。8年も経って顔が変わってないって劣化ですよ。ここから支部の体制を変えていくにはいい機会だと思ってます。

恒川: 今後を考えると、もう少し形じゃなくて中身重視にした方がいいと思うけど、本部の考えは変わらないですかね？

浅井: 実行委員会が動き出してから、情報が小出して入ってくるので後手後手になりました。もう1つ思ったのは、全国大会はこうあるべきだという人もたくさんいたって事ですね。僕は本大会はもっとスカスカにして街歩いて欲しいと思ったけど、やっぱり本部の各委員会には本大会で何かやりたいという強い意志がありました。会場割り振りの担当には、最初、全部断れて言ったけど、断り切れなかった。当初は、参加者がすべての企画を見れるようにできないか考えてたけれど、結果として2日目の午前中なんて、みんなはしごしてちょっとずつしか見られない。コロナの影響もあ



エクスカーションに出るバスを送り出す



山車曳ぎ前の安全祈願祭に参拝する小田大会委員長と大瀧支部長

るんでしょけど、みんな現場で会いたって言う強い想いがプログラムに表れた。この辺りを整理しないと、同じようにたくさんコンテンツをやり続けることになってしまう。

今回、これまでの全国大会と同じことはやらなくてもいいと思っていて、それで後に続く大会が楽になればいいと思ってたけど、それはできなかった。予想していなかったことが来て、どんどん後手に回って(大会デザインの)渦巻きにみんな入っていった感じですね。

西村:あかりコンペ参加者が山車曳ぎに参加するには、タイムスケジュールがきつすぎたのに加えて、暗くなるのが早く、かつ雨が降ってきて、スピーディーに移動するのはハードルが高かったようでした。旧青木製陶所から山車の会場、ライブミュージアムまで移動したい人がいっぱい、歩いてもらうのが主旨でしたが、歩いてもらうと間に合わないし、下手すると迷う人も出ると思って車でピストン運送しました。ミニバンがもう2台くらいあると小回りきいたのかなと思います。途中から雨が降るシュミレーションが欠けていましたね。

やはり企画ごとに何かトラブルが起きました。僕の会場担当としての読みの浅さもありましたが、会場が点在する場合には、相当な準備や予習が必要と感じます。それなら1ヶ月前から綿密にシュミレーションしたらという話もありますが、やはり現場に当たってみないと分からないのも実感で、スケジュールを緩くしないと対応ができない、なおかつスケジュールが密なら飛び回る人間がもっと必要ですね。この人数でやれる限界を超えていたと思います。会場が離れている場合の注意点は把握できたので、これからの大会で小さな街でやるにはいい参考例になったと思います。

柳澤:ウェルカムパーティは雨に救われた面もありました。プログラムとしては、バンドもそうです

が、三番叟という山車のメインプログラムやめたんです。本降りになる10分くらい前に浅井さんから「雨やばいよ」と声がかかって、チームみんなで検討して、締めを30分前に早めたんですが、結果的に二次会で美味しい料理食べて頂いたり、良かったところもあったと思います。外部会場として、大雨バージョンと晴れバージョンは考えてたけれど、小雨バージョンは考えてなかった。バンドは機材レンタル会社が、壊れちゃうからとにかく止めてくれと、でも、佐藤会長はサクッと気持ちよく吹いているし、どうしようかと思ったけど止めるを得ませんでした。

浅井:それでも、雨の中の木遣りは良かったし、企画は良かった。僕は樽酒が雨で薄まるのを心配したんで、コップでどんどん飲めって振る舞って、みんな飯は食べられなかったけど、米はたくさん飲んだと思う。

柳澤:山車の人たちが言ってたことですが、建築家が全国からこの街に来てくれることにホステイングするって言う意識が強くあって、なので、山車曳きも本祭りのときより激しいんじゃないかって言うくらい気合いが入っていた。観客がいると本気になっちゃうという、ナマのお祭りができたことが何よりで、動画や写真じゃ伝わらないものを感じられたと思います。

恒川:ナマでなければと言う意味では、レセプションの太鼓もすごかった。まさに五感で感じる、振動も含めて感じることで感動という意味です。飲み初めまでが長いので、暴動が起こるのではと心配してたけど、それどころじゃない空気感でしたね。

浅井:あの迫力では酒飲めないよね。あれだけのすさまじい振動はフリーズするよね。空気の振動で心に伝わるというのはこういうこと。彼ら彼女らは空気の伝搬を通じて会話をしていた。みんな見とれてたよね。天井が落ちるんじゃないかと心配したけど。

パーティ系も含めて、僕らはプロのプロモーターではないから、雨が降ってうまくいかないとか、ご飯が足りないとか、パーフェクトじゃないのを楽しんでくれないとね。

柳澤:青木や丸利の会場もまさにそうじゃないですか。当たり前のことじゃつまらないと我々が思ってやったところに、参加者は不思議な満足感を持ち帰ってくれたんじゃないかなと思う。

浅井:そうした意味ではこちらの意志が伝わった



賛助会商品展示会@旧青木製陶所

と僕は思ってる。逆に言うと、青木製陶所は照明器具を大光電機さんがつけてくれたけど、明るすぎて文句言ったくらいで、蛍光灯がパカパカ点滅してるくらいがらしいよねって言ってたんだ。あかりの展示のパネルも三重地域会が用意してくれて格好いいんだけど、重いし移動するの大変だから、3ミリペニアにクリップで挟んだだけでいいんじゃないかって言ったけど、それは全国大会レベルじゃないって却下されました。全国大会だからきれいにもてなそうという人もいれば、僕みたいに適当にやっつけみたいなのもあって、今回はそれなりの折衷案になったと思います。青木のアプローチのところが狭くて汚いまま良かったんだけど、きれいにしちゃったよね。

恒川:メイン会場の設営やシナリオでご苦労された川本さんからもコメントをお願いします。

川本:こんなに色々次から次へと注文が出てくるイベントも初めてでした。式典の参加者さ前日まで変わったりするんで大変でした。設営で決めかねていたのが、プロジェクターとスクリーンをどうするかで、沖縄大会のイメージからライブ映像を映しながらの式典にしたいと言われて、それは市民会館の設備ではできないので、外部業者さんを入れることにしました。シンポジウムの方はむしろこういう設備があるから、こうしようって決めただけです。メインシンポでライブ映像を入れたのは、せっかく準備したのに使わないのもったいないからと演出しました。

浅井:メインシンポでは自分でPC操作してたんですけど、映像の切り替えがスムーズでプロっぽかったですね。流石です舞台監督。毎回こういう人が要るんです。

恒川:今後、若い人たちが参加したいJIAにするなら、おじさんがやってると思われぬような企画の方がいいですよ。その上で、それに見合った金額、大会登録費もパーティ参加費も高いですよ。ラフでいいから値段安くしないと、若い人たちに来てねって言えない気がします。今回、若手の参加とか企画とかすごく良かったと思うんですね。やる気ある人たちが入って来れるような形を整えるのは大事ですね

浅井:これは先輩建築家たちが道を開けるくらい



三重地域会のイーゼル搬入作業



東海事務局と確認調整やりとり

の努力をしないとできないので、大会を機にやるのであれば、大会の形を違う方向へ変えないと、若い人たちにはとつきにくいですね。それを若手のやる気があるないで判断するのは間違いで、もう少し受け入れやすいものに作り変えていくことが必要だと思います。僕らが関わったプログラムでも、建築家の職域が広がってるのを見てもらえたと思うんですね。若い人たちのシンポジウムは、今後のJIAとか登録建築家の話に繋がる話として見てほしいなと思って企てましたが、やっぱり若い人たちが重要だと思ってくれないと、次も同じことが起こるので、全国大会で若い人がわいわいと出てきてほしい気がします。大会はカジュアルでお祭り騒ぎでいいと思うんです。そんな中でも今回イベントは真面目にやりました。そうやって、テーマを考えることが、建築家の頭を柔らかくすることに繋がればいいなって。

恒川: エクスカーションにしても、みんな観光バスで連れて行くみたいな形じゃなくて、街に建築家が溢れてるみたいな雰囲気を作り出すことの方が、はるかに意義があるような気がしますね。

黒野: エクスカーションは途中から振られたので、マンパワーが足りなかった。当初は各地域会の関わりが薄い印象だったけど、各地域会長がそれぞれ自分ごととして考えてくれたのは良かった。静岡の石橋さんや三重の森本さん、岐阜の内田さん、山田さんとも企画やツアーを通じて距離感が縮まったのはうれしかった。

感心したのは、西村さんの会場の整理とか、柳澤さんのパーティの段取りとか、川本さんの式典シナリオとか、僕では絶対できないようなことを皆さんちゃんとやられるから、すごいと感心していて、これは讃えられるべきだなと思います。讃える会やった方がいい(笑)。

恒川: 黒野さん、谷野さんのデザイン、これも大きいですね。今回のビジュアルは大成功だと思うし、陶芸研究所のあの紫、最初はみんな何だろうと思ったかもしれないけど、あれだけ統一感を持ってやられたのはすごいと思います。

黒野: 色がデザインのキーになるだろうと言うのは当初から思っていて、谷野さんが示してくれた陶芸研究所の外壁の紫色が市民文化会館にも使われていて、ストーリーとしてしっくりきたし、あ

の茶色の街に紫を入れるという選択は良かったですね。

浅井: 11日に国際委員会の人たちが、陶芸研究所でテーマの紫はこれだったんだと気づいてくれたし、アップサイクルTシャツもよかったね。

黒野: 僕は大会中着てましたけど、どうして紫なのとか、これ売ってないのとか何度も聞かれました。

浅井: これは東海支部でリサイクルイベント化して儲けてもいいね。全国からTシャツ受け入れて、それを谷野さん経由で染色して売ってるというのはどうかな。

黒野: 染色をやってくれた名芸大の学生さんとレセプション会場で売りましたが、すごく喜んでました。

恒川: 議論も白熱していますが、そろそろまとめていきたいです。今回、企画の内容の話はあまりしてません。JIAマガジンやアーキテクトで各企画の簡単なレビューを載せますが、さらに詳細なレビューも必要かなと思います。特に、私は西尾コンペのシンポとか資格制度のシンポに関わったので、この議論から何が生まれるのかも考えていきたいです。



大会初日朝 実行委員会・スタッフによる陣陣

浅井: まとめですね。まず、コアのメンバーはよく働きましたね。こんなにエネルギーを集中させなきゃいけない大会はもうやらない方がいいというのが率直な意見です。一度きりのことだからといって考え方もいるだろうけど、もうちょっと気軽にやれると格好いいと思いますね。こうなったことを僕は反省してるけど、コントロールできないのはベクトルが2つあったからですね。新しくして軽やかにやろうって方向と、そうじゃなくて、いままでのやり方に拘ったり、さらにもてなそうとする仕事が増えるわけです。始まる前の1週間はそのタスク量でパンクしているから、当日にはトラブルも起こるだろうと想像してました。結果的に大きなトラブルはなかったけど、タスク管理はできなかった。スタッフに感謝ですね。常滑を選んだ思惑は成功したと思いますし、事故がなかったのも、メンバーのおかげだったというのはつくづく思います。感謝に堪えません。ありがとうございます。

あと、常滑市とは、まちづくりに関わる協定を結ぼうという話はしてきましたが、山田副市長から、具体的に進めようと言われてます。常滑市の各課に、JIAにどういう役割で入ってほしいかを議論させたいなと思います。以前、企画課には、我々はこんなことができますと申し上げたのですが、それを各課に配布して頂けると言うことです。熱いうちにやった方がいいので、大会の処理が終わったら、年度内には、まちづくり協定を結びたいと思います。業務委託してもらうところと、ボランティアでアドバイスできることを明快にして、西尾のコンペのようなことがあれば、ぜひ受けさせてくださいとお願いしようと思います。みなさん、今後もよろしくお願いします。

大会に参加して

JIA会員である事の喜びを実感する大会

JIA建築家大会2023東海in常滑には、九州支部から50名の会員が参加致しました。大会に参加した多くの会員から、素晴らしい大会だったと称賛の声が寄せられています。

それは同時に、来年の建築家大会を開催する九州支部へのプレッシャーでもあります。改めて記憶に残る大会に導かれた東海支部のご尽力に心から敬意を表し御礼申し上げます。

本大会前からスタートした建築家大会ウィークは、約3週間で13のプログラムが実施されました。全国のJIA会員がオンラインで参加できるこの取り組みは、前回の沖縄大会で試行されましたが、この東海大会で大きな成果として確立されました。今後の建築家大会の在り方を提言するものとして、今後もしっかりと受け継いで行かなくてはなりません。

建築家大会ウィークを終え、いよいよ本大会の常滑市へ。期待を胸に膨らませ前日入りして過ごした常滑での3日間は、とても充実した時間を過ごしながら素晴らしい体験をさせて頂きました。

初日のウエルカムパーティーは途中で雨天になり、ご準備されていた催し物が中止を余儀なくされ、東海支部の皆様がとても悔しいおおいをされた事と思います。しかしながら公道を交通規制しINAXライブミュージアムに入ってきた山車曳きは、凄い迫力で感動致しました。こんな壮大な企画を実施された東海支部は本当に恐るべしです。

2日目のメインシンポジウムは異色の登壇者で、近年のシンポジウムでは最も優れた内容であったと思います。東海支部が掲げられた「環る」という大会テーマの真意を、参加された誰もがここで理解し共感された事と思います。建築が新たな領域に突入している事実。そして守るべき技術や歴史の継承とその先の進化へ。私たち建築家が担う役割の大きさを改めて確認し合う時間となりました。

その後、大会のフィナーレを飾るレセプションパーティーへ。そこで迎えていたのがあの感動でした。全国優勝を果たした高校生たちが奏でる和太鼓は今でも脳裏に焼き付いています。感動のあ



▲10支部合同「若手建築家の建築討論」参加者集合

まり涙をこらえるのが必死でした。

あつという間に過ぎた常滑大会は、JIA会員である事の喜びを実感する大会でした。

小田大会委員長、浅井大会実行委員長、大瀧支部長をはじめ、東海支部の皆様には心から感謝申し上げます。

来年の建築家大会は、11月28日～30日に大分県別府市で開催致します。東海大会を上回る事は難しいかもしれませんが、東海支部の情熱を受け継ぎ、心を込めて皆さんをお迎えしたいと思います。ぜひ、来年の九州大会にお越しいただければ幸いです。



松山 将勝 (JIA九州)

JIA副会長/九州支部長

沖縄大会の意図を継承して盛り上げて頂きました

2022年の沖縄大会は、支部会員が少なく、大会の準備をする人数に限りがあり、またコロナ禍の影響もあるため、十分な協賛金収入が見込めないことが予測されたため、本大会ならではのプログラム以外の委員会や全国会議、支部などで開催するシンポジウムやセミナー、会議類を事前にオンラインで開催して貰うなど、開催地の負担軽減を目指しました。



▲10支部合同「若手建築家の建築討論」会場の様子

常滑大会でも沖縄大会の意図を継承し、大会1か月前から建築家大会ウィークとして実に多くのプログラムを組み立てて盛り上げて頂きました。特に全国10支部合同企画「注目の若手建築家による建築討論」は、会員・非会員含め、全国の若手建築家が今何を考え、どのように行動しているか大変刺激になる内容で、本大会初日のシンポジウムでは時間が足りないほど熱く盛り上がった企画でした。来年の別府大会では、若手育成を前面に打ち出し、さらにブラッシュアップして開催できることを願っています。

また、西尾コンベンションは、発注者を支援することの大切さや仕組づくり、登録建築家・専攻建築士制度を有効に活かすアイデアを発信できたと思います。

メインシンポジウムでは、建築家ではない3名のパネリストとどのような展開になるか楽しみにしていましたが、古谷さんの見事なモデレートによる「還る」をテー

マにしたパネルディスカッションは、私達が普段考えもしないような様々な切り口で実に魅力的でした。

大都市ではない地域での会議やパーティー会場など準備には大変ご苦労されたことと思います。ウエルカムパーティーでの予期せぬ降雨は屋外開催の難しさを改めて考えさせられました。また、伝統文化を継承されている山車曳きや、レセプションパーティーの高校生による和太鼓演武の元気な姿から沢山のエネルギーを頂きました。

大会実行委員会の皆さまは、大会準備に翻弄された一年だったと思います。大変お疲れ様でした。この場をお借りして御礼申し上げます。来年の別府大会にてお目にかかれまことを楽しみにしています。



伊良波 朝義 (JIA沖縄)

JIA沖縄支部 支部長

場が持つ力



これまで、幾度か建築家大会には参加しましたが、迎える立場は初めての経験であり、緊張感も少しありつつ、いつもと違う景色が見えるかな、という期待もありました。前日から準備で会場入りしましたが、今大会はメイン会場である文化会館の他にサテライトが複数ある分散型で、それぞれの場が持つ特性に合わせてプログラムが組み立てられており、これがうまく機能するか、参加者の反応はどうか、心配になると同時に、それを確認するという楽しみも見つけました。

さて、一日目の始まりです。文化会館に着くや否や法被を着せられ、気恥ずかしさもありましたが、慣れると祭り気分になり、一体感も生まれるもので、これは「要るな」と思いました。続々と全国から会員が来場、なかには見知らぬ方もみえたので、挨拶や案内に忙しく、西尾コンベンションボだけ参加できました。理顕氏のお話は辛口でしたが、JIAと他会との違いや、それ故の自立性の高さに言及され、得心するとともに「喝」もいただきました。西尾コンベンションについては高く評価されており、誇らしい

気持ちになるとともに、中心メンバーとして関わられた方々に改めて感謝しました。その後場所を移し、図らずも山車曳きに参加することになりましたが、これが凄く良かったです。直線は余裕、曲がる時が「やばい」。迫力と真剣さが一気に上がり、恐怖と興奮がやってきます。地元の人とも触れ、良い体験をさせていただきました。山車はそのままパーティー会場に。まさに場の持つ力、あの場があるから野外の意味がある、そう感じました。

二日目。まずは陶芸研究所へ。今大会のイメージでもある薄紫のグラデーション、シンプルな形状であるが、内外ともに光の使い方がうまく、いや良い建築です。茶室でお茶をいただきました。その後、青木製陶所を見学、敷地形状から自然発生した平面形状と高低差を活かした階層処理、鎮座する窯、暗い空間に差し込み光を楽しみながら、あかりコンペの作品を拝見、場の特性を捉えた会場になっていました。丸利陶管に到着、国際シンボが終わりかけていましたが、各国ゲストも場の雰囲気気に満足している印象を受けました。常滑のまち

を楽しみながら文化会館に戻り、式典、メインシンポジウムに参加。パネリストの井上博成氏が凄かった。綿密な計画と高い提案能力で次々と事業を進めているが、スケールがでかい。古谷氏も「飄々」と形容していたが、これは夢物語で真実ではないのかも、と思ったほどでした。そしてセントレアに向かいレセプションパーティ。和太鼓を演奏する若者がほんとに美しく感動しました。

三日目は片付けのため、エクスカッションには行けませんでした。もう一度各会場を見つめ直すことができ、案外良い最終日となりました。

振り返ると東の間の三日間でしたが、長い時間をかけて計画・準備された支部の皆様、本当に感謝しております。大変楽しませていただきましたし、全国から参加した会員の「良い大会だね」という言葉を、あちこちで聞きたび「よし!」と拳を握っておりました。

出口 基樹 (JIA三重)

日新設計



改めて建築家を考えられる全国大会

昨年度入会で今回が初参加の大会となりました。予想を上回る活気と熱量で、どの企画も興味深く参加できました。サポーターとしても参加したのですが円陣を組んでの意志統一に実行委員の皆様が想いが伝わってきました。リアルで人が集まる機会が減っている中で、全国から建築家が集まり同じ課題や目標に向かう強い一体感を感じられました。

西尾コンベンションポジウムの山本理顕氏の基調講演では自由な設計をどう守るのかについて語られ、JIAが社会に対して期待されている事が示されており、今後の資格制度の議論にも参考にな

りました。自由な設計を誰が責任を持って行うのか、どのような人達なのか、誰にとっても分かりやすくなればより建築家に頼みやすい世の中になるのではないのでしょうか。独立した立場で適切なアドバイスをくれる建築家がより社会に寄り添っていくためには、西尾市の事例はJIAが独立した立場で「頼りにされた」ケースであったと思います。会場では様々な課題や問題が議論されていましたが、個人的に大切にしたいことは建築設計が専門家を頼りにせざるを得ない分野である点だと思っています。業務独占であるからこそ門を大きく開き、すぐそばにいる信頼できる

プロフェッショナルであるよう社会に寄り添い続けなければいけないと改めて感じました。

夜は二日間共に盛況で、ウェルカムパーティはあいにくの雨ではありましたが、地元の人や関係者や住民の皆様とJIAが共にパーティを盛り上げる様子は、西尾コンベンションポジウムでの山本氏の基調講演の中の建築家は「地域と共に」というキーワードを彷彿とさせる時間で感慨深いものがありました。

入会して建築家としてできる事を考える機会が増えましたが、二日間かけて改めて見識を広められました。企画運営にご尽力された実行委員会の皆様や盛り上げてくださった賛助会の方々に感謝し、心持を新たに自分ができる事を取り組んでいきたいと思えます。

寺田 智之 (JIA愛知)

黒川建築事務所



新年あけましておめでとうございます 2024年

(静岡・愛知・岐阜・三重地域会 五十音順)

<p>(有)聖建築設計事務所</p>  <p>代表取締役 大瀧 正也</p> <p>〒424-0923 静岡市清水区幸町10-38 TEL:054-334-2654 FAX:054-334-6468</p>	<p>(株)石本建築事務所 名古屋オフィス</p> <p>オフィス代表 奥井 康史</p> <p>〒460-0008 名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル TEL:052-263-1821 FAX:052-264-1990</p>	<p>(株)伊藤建築設計事務所</p> <p>取締役 相談役 森口 雅文 代表取締役社長 小田 義彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 桜通ビル TEL:052-222-8611 FAX:052-222-1971</p>
<p>(株)岩崎設計事務所</p>  <p>代表取締役 岩崎 英一郎</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-14-24 TEL:052-231-8787 FAX:052-231-8827</p>	<p>(株)オウ環境設計事務所</p> <p>代表取締役会長 中西 暁 代表取締役社長 野々川 光昭</p> <p>〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-32上前津KDビル6階 TEL:052-242-2331 FAX:052-242-2354</p>	<p>(株)城戸武男建築事務所</p> <p>代表取締役 城戸 康近</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内2-11-23 富士和ビル2F TEL:052-231-5451 FAX:052-231-5450</p>
<p>(株)黒川建築事務所</p> <p>代表取締役 黒川 喜洋彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-9 スガキコ第2ビル2F TEL:052-203-0281 FAX:052-203-1884</p>	<p>(株)三和建築事務所</p>  <p>取締役社長 見寺 昭彦</p> <p>〒455-0015 名古屋市港区港栄4-5-5 TEL:052-661-2211 FAX:052-661-2247</p>	<p>(株)地域計画建築研究所(アルパック) 名古屋事務所</p> <p>〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F TEL:052-462-1030 FAX:052-462-1061</p>
<p>一級建築士事務所 デザイン スズキ</p>  <p>鈴木 利明</p> <p>〒440-0012 豊橋市東小鷹野4-4-8 TEL:0532-61-4245 FAX:0532-61-4215</p>	<p>(株)中建築設計事務所</p> <p>代表取締役 廣瀬 高保</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄1-27-27 TEL:052-262-4411 FAX:052-262-4414</p>	<p>ホームデコール設計事務所合同会社</p> <p>近藤 万記子</p> <p>〒465-0043 名古屋市名東区宝ヶ丘8-5 TEL:052-526-1580 FAX:052-526-1581</p>
<p>森建築設計室</p>  <p>森 哲哉</p> <p>〒468-0007 名古屋市天白区植田本町2-812-1 TEL:052-807-3205 FAX:052-807-3206</p>	<p>(株)ヤスウラ設計</p>  <p>代表取締役 水野 豊秋</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄2-35-6 TEL:052-241-7211 FAX:052-241-7333</p>	<p>(株)ワークキューブ</p> <p>桑原 雅明 吉元 学 平野 恵津泰</p> <p>〒460-0024 名古屋市中区正木1-13-14 TEL:052-265-8412 FAX:052-265-8402</p>
<p>内田建築設計事務所</p> <p>内田 実成</p> <p>〒501-0514 揖斐郡大野町西方北野口791 TEL:0585-34-3508 FAX:0585-34-3509</p>	<p>(株)森本建築事務所</p> <p>代表取締役 森本 雅史</p> <p>〒518-0623 名張市桔梗が丘3番町2街区68-4 TEL:0595-65-2638 FAX:0595-66-2639</p>	<p>(有)サーージュコーポレーション</p> <p>代表取締役 鈴庄 禮子</p> <p>〒606-8312 京都府京都市左京区吉田上大路町14-6 TEL:075-708-3081 FAX:075-708-3082</p>

旧伊東合資会社は半田市の北部亀崎町にあり衣浦湾に面していた建造物群である。江戸時代より醸造、海運による富の蓄積もあり明治以降は尾張の産業を担う土地としても発展を遂げた。伊東家は天明8年(1788)に廻船業も併せもった酒造家として創業、5代目伊東孫左衛門が明治41年(1908)伊東合資会社を設立。大正10年(1921)には醸造法の研究所をも設置した。8代目伊東孫左衛門(良夫)が平成20年(2000)に廃業するまで清酒「敷嶋」の他、醤油の醸造業も行ってた。敷地内には工場や倉などが多数あり本宅(主屋他)も同敷地内に点在する。本宅の主屋は衣浦湾に面する南側道路より門を介して玄関へと入る建て方となっている。切妻屋根平入形式の一部2階建てで間口9.5間、奥行5間の構成となっている。家族の生活の場は玄関より西で構成され、東は事務所棟になっている。

建物は、明治、大正、昭和、平成と時代の推移による家族構成や所有者の社会的立場により少しずつ改築が行われた模様である。主屋から西は渡り廊下を介して新座敷があり南北の三間続きの間取りとなっている。南北の寄棟造りの屋根にコの字型の銅板葺きの廻り縁が下屋として取付く。本土蔵は新座敷より廊下を介して最西にあり、敷地の西側道路に面して切妻屋根の棟を南北にした土蔵造りとなっている。伊東家は代々



庄屋を務める家系であり、醸造業・廻船業で財を成していたので、明治23年(1890)の明治天皇の御臨幸時には本宅が休憩所に用いられる予定でもあった。がしかし、都合により当日の御臨幸は実現しなかった模様である。このように伊東合資会社としては近年まで醸造業を営んでいたが、広大な敷地の中にある現存する建屋の中で主屋、新座敷、本土蔵の3棟が令和4年(2022)に「造形の規範」、「国土の歴史的景観に寄与する」という文化庁の答申で国の登録有形文化財に登録された。

近年9代目伊東孫左衛門(優)の手により既に売却されていた工場棟などが買戻され、それに併せて酒造りも近代的になった新工場が始まった。酒のブランドはやはり「敷嶋」であり20年ぶりの復活となったのである。現在、買戻された工場は色々な催し物を開催できるように催事場等に改修されている処であり、9代目の頭の中には

敷地全体で催事を行うという計画が出来上がっている模様で非常に楽しみであり、登録文化財の手続きに関わった一員としても嬉しいかぎりである。

【概要】

名称：国登録有形文化財 旧伊東合資会社主屋、新座敷、本土蔵
所在地：半田市亀崎町9丁目111番地
建築年：主屋、新座敷、本土蔵、明治中期
大正・昭和・平成増改築
構造 規模：木造2階建て一部平家、瓦葺
登録番号：23-0580、23-0581、23-0582(2022.10.31)
登録年月日：令和4年10月31日
参考資料：半田市誌地区誌篇、半田市誌、亀崎町誌、愛知県の近代化遺産総合調査報告書

原 眞佐実 (JIA 愛知)
原建築設計事務所



編集後記

●2023年の年末、開幕まで500日となった大阪・関西万博が逆風にさらされています。費用の高騰、

参加国の撤退、スケジュールの遅れと問題続きで、世論調査でも「開催不要」が7割近くになっています。オリンピックなど巨大イベントが敬遠されるようになってきている中で、万博自体もスマホ一つで簡単に情報を検索できるし見られる今、その存在意義が薄れたという意見もあります。しかし、ネットで世界の情報に容易にアクセスできるからこそ、リアルな経験に価値を見出す人々が多くなります。映像を見ているだけでは満足できず旅行で現地を訪れる。ジブリ映画を見てジブリパークを訪れる。ネットショップで各地の名産品を買っただけでなく物産展を訪れる。そうした体験することに価値を見出す先に、万博の生き残る道があるの

かもしれない。(石田 博英)

●1月号は恒例の新年あいさつに始まり、JIA2023の活動への振り返り、新年度への展望、体制づくりなど、各方面から1年間の成果と期待が込められ、毎月の機関誌の中でも特別な存在となります。特に今1月号は、建築家大会報告特集として、大会に注いだエネルギー、活気、熱量が伝わる特集企画となりました。コロナ禍の収束で各地域会も日常に戻りつつある中、岐阜地域会では、今年度事業に新規入会者などを積極的に担当委員長としてお願いし、進めている記事が挙げられていました。地域会活性化と若手の育成にはとても重要で大切なことと思いました。また、常滑大会は地元を巻き込んで小さな町で大きな実りのある大会になったことは、確実にテーマは達成できたのではないのでしょうか。

又、大会での若手の積極的参加の問題も、前述のような試みを取り入れ、少しずつ新しい大会にシフトする必要があるのではないかと感じました。(江川 静男)

ARCHITECT

第424号

発行日 2024.1.1 (毎月1回発行)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会

愛知地域会ブリテン委員会

株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564) 21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

JIA建築家大会2023東海in常滑 大会を終えて

10月12日の住宅等連携会議に始まり11月3日の「注目の若手建築家による建築討論」まで、資格制度・保存再生・ゴールデンキューブ賞(国際)・建築アーカイブなど、「環る」を主題とした建築家大会ウィークの14のプログラムでは、WEB上で現況報告と熱心な討議がなされました。なかでも全国10支部合同企画では、3回に亘りJIA新人賞を目指す支部推薦の若手建築家4名が各自の仕事ぶりを紹介、それに受賞経験のあるモデレーターがコメントし全員で討議するという試みは、JIAそして設計界の将来を展望する意味でも大変興味深いものでした。

大会初日は天気にも恵まれ、「環る」のテーマに合わせた街歩きとランチミーティングは好評でした。シンポジウム「西尾市生涯学習センター(仮称)コンペ」から公共建築の設計者選定を考える」では、JIAが西尾市と業務契約を結んで募集要綱作りから審査員の紹介、公開審査・設計者選定までを、発注者を全面的にバックアップして進めた顛末と課題について紹介、討論され、多くのJIA会員だけでなく数十名の行政の方達も熱心に聞き入っていました。

前夜祭では、INAXライブミュージアムを借り野外で催され、メインイベントである地元の常石神舎の無数の提燈で飾られた山車曳きが夕暮れ時に映え、窯のある広場の煙突の前に鎮座すると、海外からの賓客たちも記念撮影に興じていました。全国4チームによるバンドが始まり佐藤会長のサックス演奏が終わるや否や雨が降り出し、残りの3チームは不発、山車も合羽を着せられましたがそれも風情があり、最後の若集の木遣りは大迫力でした。

大会2日目は生憎の雨でしたが、各会場の移動には巡回バスが効力を発揮しました。資格制度委員会主催のシンポジウム「西尾コンペ-その2」では、コンペ参加資格要件として、設計実績評価より建築設計者が具備すべき資格・資質のありかたを重視する方式について議論しました。

大会式典は、国土交通省宿本審議官、愛知県大村知事、常滑市伊藤市長、タイ王立建築家協会チャナ会長他多くの来賓を招いて開催されました。メインシンポジウムの4人のパネラー各自が5枚の写真を使って「環る」に沿った講演では、地方都市にあって全日本を視野に置いた若手事業家からは元気を貰い、常滑市の歴史・文化を知り尽くし街のこれからを思う方たちの話を聞き、JIA・建築家はどのように街に貢献できるかを探るシンポジウムでした。

最後の夜のレセプションパーティーは愛知国際展示場の会議室を使って、日本福祉大学付属高校和太鼓部の迫力ある演奏で幕が上がり、遠来のゲストはじめ全国各支部から参加して下さった500名の会員が、互いの健康を確かめ旧交を深めました。

常滑市山田副市長、INAX後藤学芸員、常石神社社中の皆さん、2次会の為遅くまで延長営業して下さった飲食店の皆様、常滑市の関係者他多くの皆様のおかげをもちまして大会が成功裏に終えることが出来、感謝しています。今後、JIAと常滑市が結ぶ「まちづくり協定」に沿って、恩返しができればと思っています。そして、浅井実行委員長、大瀧支部長はじめ、4地域会53名の実行委員会の皆様、本当にお疲れさまでした。



大会委員長
小田 義彦



**JIA建築家大会
2023東海in常滑**
ご参加・ご協力いただき、
ありがとうございました！